

# 反障害通信

23. 2. 18

128号

わたしの中の「非論理的な」こと——法則の物神化の陥穽批判——

論理性を求めてきたのですが、わたしの中にある非論理的なことを論理的な文でなく、エッセー的に書いてみようと思います。と言っても、論理的な文になるのですが。

この巻頭言で80%ルールのようなことを書こうとしていました。

「80—20ルール」のようなこと、誰かが、体制にあがなう、あがなおうというひとが20%という話をいるのを見ていました。この「80—20」に関しては、同じような数字が他にも出てきます。医療で緩和処置ができる医者は20%。かつて、ALSになって人工呼吸器をつけないで死んでいくひとが80%という数字も出ていました。これは運動の成果だと思ふのですが、70%に下がったと言われていました。他にもこの「80—20」で何かあるかも知れません。

これは「民主主義の多数決の原理」以前の丁寧な確認作業ということで、4分の3とか80%の確認ということで、そのような「大方のひとの賛成」ということでは、この数字があがっていくのかもしれませんが。「論理的ではなく」という話をしたのですが、ちょっと踏み外せば、これは共同主観性の形成というところでの、目安が80%という数字くらいになるということでも、リンクするのではないかと思います。

そもそも、このような法則性ということでは、エンゲルスの弁証法を法則性ということでは図式化していった陥穽があります。元よりマルクス——エンゲルスはヘーゲル左派として出発しつつも、ヘーゲルの絶対精神の自己展開ということを批判したのです。それからすると、エンゲルスの弁証法を法則として立てること自体が、ヘーゲル返りといわれることです。「真理とは共同主観的に形成された客観的妥当性にすぎない」と言われることであり、それを絶対的真理なる絶対的なことを持ち出すことがヘーゲル回帰と言われることなのです。

余談的な話を書くと、この法則の物神化とは真逆の非科学的ジンクスのような話、迷信のような話もわたしの中にあります。たとえば、わたしの家族は阪神タイガースが優勝したときに優勝するときに死ぬということがありました。父が死んだのが、阪神タイガースが日本一になった年、兄の連れ合いが死んだのがセリーグ優勝した年、母が死んだのが、タイガースがクライマックスシリーズでセリーグ制覇をした年でした。わたしは実はタイガースファンなのですが、タイガースがかなりいい成績を収めそうな年になると、親戚の誰かが闘病していると、反タイガースになっていました。実は、昨年兄が余命宣告をされて闘病していて、阪神タイガースが優勝を逃し、越年するだろうという思いを抱いていました。でも、昨年に亡くなりました。いわゆるジンクスが崩れたのです。「何を非科学的な」と笑われることで、迷信のような事なのです。

しかし、一方で、「科学」とされることに対する不信のようなことがあります。わたしは

反差別論をライフワークにしているのですが、反差別ということで読んだ『科学の名による差別と偏見』という本がありました。そういうところで、「科学的社会主義」なる言葉への違和をもっています。哲学の世界での科学主義と人間主義との弁証法、双方批判ということもあります。そのようなこととしても、わたしの中には、科学主義に対する批判があります。

誤解のないように書いておきますが、科学と言われることが法則性ということをもとめ、現実世界のよりよい生活のために、それを応用していくことを全否定しているわけではありません。むしろ、それはそれとして行っていくことだと考えています。

そのことは、武谷技術論の「技術とは客観的法則性の意識的適用である」という規定の科学への拡張として、それを巡る議論・批判があるのです。すなわち、法則ということを物象化しているのではないかという批判です。

そもそも法則ということが絶対的真理ではないというところで、試行錯誤的などころで、常に疑いを抱きつつ、現実科学ということも援用しつつ生きていくことだということです。

何を言っているのか判らないような文になっていると批判されるようなことですが、迷いかいようなことを大切にしつつ、自らの行うことを常に検証しつつ活動していくことの必要性の提起です。

(み)

(「反差別原論」への断章) (57) としても)

## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 128 号」アップ(23/2/18)
- ◆メインの「反障害——反差別研究会」のホームページ不備・校正があり、かなり大幅な更新をしました。今号の最後に掲載している、「Ⅲ.「会」の当面の研究・執筆課題 (2022.5 全面改定)」を新たに書いています。ホームページ校正したところは、ホームページを見てください。訂正箇所はしばらく赤字にしています。
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も DVD などの他のメディアでの郵送などで対処したいと思っています。横書き版は最後の「連絡先」から連絡をお願いします。
- ◆「反差別資料室 C」で、また見れない文書が出ています。とりあえず、タイトルの最後に「反障害通信」の掲載号数を書いていますので、メインホームページの「会報」の当該通信号から見てください。
- ◆「反差別資料室 C」の「文献室」を、新しい本の購入や読書に合わせて、一年ぶりにリアップしました。

## 読書メモ

今回は[廣松ノート]の(2)の『世界の共同主観的存在構造』の続きはお休みにして、この間問題にしてきたアーレントの全体主義論の関係で、スターリンの著作を取り上げます。山口定『ファシズム』(岩波現代文庫)も何とか間に合わせて挟みました。

たわしの読書メモ・・ブログ 609

### ・スターリン『レーニン主義の基礎』彰考書院 1946

この本はレーニン死後あまり日がたたない1924年5月初旬スヴェルトドロフ大学での講演録です。おそらく大方のひとたちは、本を読むとき、まっさらなところから読み始めるのではなく、共鳴しそうな本、あまり予断をもたないところから読み始める本、そして、むしろ否定的批判のために読むという必要にかられて読み始める本、というようなところから始めるのではないかと思います。この本は、わたしにとって、三つ目の類の本です。

今、一般的にスターリンの評価は少なくとも否定的批判的な論調になっていますが、スターリンへの批判は性格問題に収束したり、大状況下の規定性や時代拘束性という議論になったりもしています。一方で、ロシア革命の評価も含めて、レーニンの思想・理論からスターリンが何を引き継ぎ、何を引き継がなかったのか、何が独自の思想なのか、ということを見極める必要があるという議論も起きています。わたしもそのような問題意識をもってこの本を読み始めました。

そして、わたしのこのメモは、文献学的研究という類のことではありません。そのようなところでは、レーニンを読み込みスターリンも読み込む必要があります。そのようなところまで踏み込む余裕はありません。わたしの問題意識は、多くのひとたちが社会変革運動の軸となっていたマルクスの流れの運動が敗北的局面の中で、「社会は変わらない」「市場経済(資本主義社会)はなくなる」として、市場経済—資本主義社会を前提にして議論を進めるとして、そこで問題の分析の掘り下げをネグレクトしてしまう傾向さえ生み出されていることへの批判です。そこで、総体的にニヒリズムに陥ってしまいます。だからこそ、過去の運動の総括の中で、どこが間違いだったのか、どこで間違えたのかをきちんと総括する中で、社会変革の可能性を指し示していく必要性が今こそ必要になっています。

最初に目次を挙げておきます。(この本は古い本で、旧字体と送り仮名がかなり使われていますが、新字体に直しています。)

## 目次

### 序論

### 第一章 レーニン主義の歴史的根拠

### 第二章 方法

### 第三章 理論

#### a 理論の重要性

#### b 自然成長の理論の批判、または運動における前衛の役割

#### c プロレタリア革命プロレタリアートの独裁の理論

### 第四章 プロレタリアートの独裁

#### a プロレタリア革命の手段としてのプロレタリアートの独裁

- b ブルジョアジーに対するプロレタリアートの支配としてのプロレタリアートの独裁
- c プロレタリアートの独裁を具体化した一つの国家形態としてのソヴィエト権力

## 第五章 農民問題

- a 問題の概説
- b ブルジョア民主主義の革命中における農民
- c プロレタリア革命中における農民
- d ソヴィエト政権確立後における農民

## 第六章 民族問題

- a 問題の概説
- b 被圧迫民族の解放運動、およびそれとプロレタリア革命の関係

## 第七章 戦略と戦術

- a プロレタリア階級闘争の指導の科学としての戦略および戦術
- b 革命の諸段階と戦略
- c 運動の満潮ならびに退潮と戦術
- d 戦略上の指導
- e 戦術上の指導
- f 改良主義と革命主義

## 第八章 党

- a 労働者階級の前衛としての党
- b 労働者階級の組織部隊としての党
- c プロレタリア階級組織の最高形態としての党
- d プロレタリアート独裁の手段としての党
- e 党は分派を許さざる意志の統一の表示である
- f 党は日和見主義分子を排除することによって強大となる

## 第九章 活動の仕方

スターリン批判はその粛清においての批判は当然としても、わたしは(少なからずのひとは)、それだけでなくレーニン崇拜により、自らを権威付けるレーニンの理論のスターリン的解釈が批判されました。レーニンの著作を改ざんしたともいわれています。そういう中で、そのことによるマルクス・レーニン主義なる教条主義的固定化された「官許マルクス主義」とか「正統派マルクス主義」なることを広めました。そこで、世界の「共産主義運動」をけん引しようという流れが形成され、マルクス派の流れの運動をかなり規制して歪め、むしろ、国際共産主義運動に負の歴史を刻んでしまったとわたしは押さえています。

この読書メモを、わたしは3つのモーメントで分類してコメントを残したいと思います。現実にはひとつの論攷でかなり重なっていますし、改ざんの問題もあり、そのことの検証も必要となりますが、先に書いたようにわたしにそのような余裕はありません。アウトラインのメモです。

#### (1) レーニンをほぼ忠実になぞったこと

スターリンがレーンを引き継いだと称して「マルクス・レーニン主義」として定式化しようとしたこと。

「或る人々によれば、レーニン主義とは、ロシアの特殊的な条件の下にマルキシズムを適用したものにはかならぬといわれている。が、この提議は真理の一面を含むものではあるが、しかし、真理のすべてをつくしたものではない。いかにも、レーニンは、事実、ロシアの実状にマルキシズムを適用した。彼は、しかも、まったく自家のものとなし、恣に巧妙に適用した。しかしながら、もし、レーニン主義がただマルキシズムをロシアの特殊なる条件の下に適用したものにすぎず、そしてそれ以外の何物でもないとするなれば、レーニン主義は、純粋にロシアのみの、即ち全然一国内に限られたる性質のものとなる。しかるに、われわれの知れるごとく、レーニン主義は、一つの国際的な現象である。ロシアにおけるばかりでなく、それは国際主義に根ざしている——これが右の定義が狭く一面的と考える理由である。」4P・・・現実的に「先進資本主義」と言われる国において革命は起きなかったから、この論理は成り立ちません。レーニン主義・レーニン理論の普遍性に関しては、わたしは、むしろロシアに於ける暴力的専制支配やマルクスの時代からの専制支配の時代拘束性でとらえ返すことだと考えています。しかし、その上で、なおかつ極右的なファシズム的なことが繰り返し生まれてくる暴力性もとらえ返しておかねばならないとは思うのです。

「レーニン主義とは、帝国主義およびプロレタリア革命の時代におけるマルキシズムであり、さらに正確にいえば、レーニン主義は、一般的にはプロレタリア革命の理論ならびに戦術であり、特殊的には、プロレタリア独裁の理論ならびに戦術である。」5P・・・レーニン主義のスターリン規定ですが、ここから、マルクス・レーニン主義の定式なるものを生み出しています。このことのとらえ返しがいまとわれているとわたしは押さえています。

「資本主義社会の下にあつては、労働者運動の根本問題は、プロレタリア大衆の暴力、すなわち直接行動、総同盟の罷業、または蜂起によってのみ解決されるものであること、・・・・・・」26P・・・レーニン主義の暴力性

「第四章 プロレタリアートの独裁／b ブルジョアジーに対するプロレタリアートの支配としてのプロレタリアートの独裁」67P～・・・ここで展開しているのはプロ独裁論で、小ブル批判もしているのですが、ロシア革命は実際は小ブルインテリゲンチヤが領導した革命に収束したのです。

「(「ソヴィエト権力の主なる特徴」の一つとして)ソヴィエト権力は、階級の存続が可能な限り、あらゆる国家組織の中で、最も包括的な、最も民主主義的な組織である。事実上、ソヴィエト権力は、搾取者との闘争における労働者と被搾取農民との同盟の表現であり、協同の表現であり、従ってまたそれは人口の多数者が少数者に対し、行使する支配であり、また多数者の国家であり、同時に多数者の独裁の具体化である。」79P・・・「搾取者との闘争」という表現は当たっていない、少なくともソヴィエト独裁が成立したなら、搾取者はブルジョアジーでなく、搾取者がいるとしたら、それは国家になっているはず。差別という問題をとらえ返していたら、マイノリティ的差別から「多数者の独裁」という概念は出てこないはず。

最初の方の展開は、レーニン主義を忠実に書こうとしているので、まさにスターリニックな「一国社会主義」建設路線ではなく、意外にもレーニンの国際主義・世界革命論的な展開を書いています。後の方で、レーニンも言っていたと称した一国社会主義革命論に収束させています。

## (2) レーニンにもあったことを極端化したこと

レーニンも現実主義路線でそういうことを言ったが、かなり歪曲している可能性があること、です。

「(レーニンの主張として)従来、一国のみにおける革命の勝利は、不可能とされていた。それは、こう考えられていたからである——即ち、ブルジョアジーの克服は、ただ、あらゆる先進国の、少なくともこれらの大多数の国々の、プロレタリアートの協同によってのみ遂行されるから、と。この論駁は、しかし、もはや事実と符合しない。われわれには今日にあっては、かかる一国における勝利が可能なものとして、そこから出発しなければならぬ。」55-6P・・・レーニンは基本的に世界革命が必要という主張なのですが、これがレーニンが言った、書いたことならば、それは「レーニンの現実主義」と言われることなので、それを強調して路線にまで高め、「一国社会主義が可能」としたのは、スターリニックな歪曲といえること。なぜ、可能なのか論理的には何も語っていません。

「(レーニンからの引用として)実際的な場合では、部分の利害は、全体の利害と撞着することがありうる。もしそれが撞着するときには、われわれは、部分を抛棄することが必要である。」111P・・・民族問題のレーニンの部分従属論とも言うること。これは、そもそもレーニン主義が正しいとされる民族自決権へのローザやトロツキーが指摘していたアンチノミー的矛盾なのです。そもそもレーニン運動論——組織論の中央集権主義や差別の階級支配の道具論から出てきていること。

「しかるに、他方、小なる被圧迫国の社会主義者は、主としてわれわれの一般的公式の第二の部分、すなわち『自発的の結合』を力説しなければならぬ。なんら、国際主義者としての彼の義務を害うことなく、彼は(周囲の事情により)自己の国民の政治的独立を説くとともに、近隣のある国への包括を推進することも可能である。しかし、いかなる場合においても、彼は、各国独立の主義、排他心、民族主義的偏見と闘争し、より広い重大なる問題を主張せねばならぬ。さらに、彼は、特殊利害を国体的利害の下に従属せしめることに賛同しなければならぬ。」121P・・・そもそも民族自決権と真逆なことを言っている、民族問題の従属理論なのですが、レーニンにもそれがあって(そもそもレーニンはグルジア人で少数民族問題の当事者性があるとされるスターリニックの民族理論の影響を受けたという説さえあるのですが)、それならば、そもそも民族自決権など成立しないという、レーニニックの民族自決権の幻想とも言いえることです。スターリニックのこの件は、ここまで言うかという展開です。

「しかしながら、それゆえに、階級が消滅すると共に、プロレタリアートの独裁が死滅すると共に、党もまた消滅するに違いないと結論することが出来る。」169P・・・現実には真逆に「党の支配」となった。スターリニックは自らの路線の誤りを自覚しなかったのでしょうか？

「第八章 党/e 党は分派を許さざる意志の統一の表示である」169P～・・・分派の禁止はレーニニックの党組織論からも規定されて出てきたこと、これがスターリニックの独裁——

粛清の元凶となったとも言われること。これはどこまでがレーニンの責任かスターリンの転回か、と判断がむづかしいけれど、レーニン理論の最悪化とも言いえること。

### (3) スターリンの独自の転回

「ソヴィエツト権力は、一つの全体的国家組織を設立するために地方ソヴィエツトを統一し、化成したものであり、すなわち、被圧迫・被搾取大衆の前衛としての、支配階級としての、プロレタリアートの国家組織である。この統一されたる国家組織は、すなわち、ソヴィエツト共和国である。」77P・・・ソヴィエツトは運動体であって、国家などではない。

「国家組織を設立する」ではなく、国家ということをし揚することが目指すこと。スターリン国家論は資本主義社会の支配階級のブルジョアジーの国家と同じ。プロレタリアートの独裁ということがあっても、必要としても、支配者にはならない、支配——被支配者の関係を止揚することを懐胎した独裁でしかない。レーニンが国家の共同幻想的性格を押さえられなかったことから繋がっています。

「農民は、自由主義ブルジョアジーと提携し、そして旧政府を攻撃したのだった。すなわち農民はブルジョアジーの予備軍だったのである。」88P・・・何とも非論理的文書。農民は階層。ブルジョアジーと提携すると予備軍になる？ プロレタリアートも自由主義ブルジョアジーと封建制と闘うために提携した歴史があります。

「帝国主義的桎梏から被圧迫国を解放するための民族運動は、たしかに、いま利用しつくされざる革命的能力を包蔵するものであり、これらの能力は、われわれの共通の敵を打倒するために、即ち帝国主義の打倒のために、利用することの可能なるものである。それがこの問題に対するレーニン主義者の回答である。」109-10P・・・民族問題の利用主義。民族問題で露骨な「利用」という言葉。「利用」という言葉は、民族問題と階級闘争が差別という共通のベースで繋がっていることをとらえられないところから来ています。レーニンにも差別の階級支配の道具論があり、そのこととリンクしているけれど、明らかな踏み外し。このことは、スターリンの民族問題での対応に対するレーニンの批判にも顕れているのではないのでしょうか？

「党は、しかしながら、一切の党組織の単なる総計ではない。同時に、党派、これらの諸組織の統一の中心であり、統一されたる全体の形態上の集中点であり、それは、上下の指導機関を有し、更に、少数者を多数者に従属せしめる権限をもち、決議を通過させ、すべての党員がそれを実行する義務を有する実際的決定を行う権限をもつものである。」160P・・・党内の差別的序列と全体主義。共産主義とは真逆の思想

「(レーニンからの引用?として)そして、組織ということは、すなわち権力が樹立されたことを意味し、思想の権威が、権力の権威に変わったことを意味し、党の下級組織が上級のそれへ服従するということを意味するものである。」161P・・・権力は権力の解体のために一時的に行使することはあっても、権力を解体していくことが共産主義。権威などという差別的なものを持ち出すことは、共産主義の否定。

「第八章 党/d プロレタリアート独裁の手段としての党」166P～・・・プロレタリア独裁の機関はソヴィエツト。ソヴィエツトからなぜ党になったのか？ 手段などでない運動体がなぜ全体主義的・抑圧的党になったのか、レーニン組織論の帰結であり、またスターリン的歪曲の極。

「しかしながら、決して党は、それ自身を目的とせる、それ自身に満足せる力として考えられてはならない。」166P・・・実際にそうってしまった。

「第九章 活動の仕方」178P～・・・アメリカ的精神を吹き込む

「レーニン主義は一つの学校であって、レーニン主義の理論および実践の研究は、党および国家の官吏に独特な型、すなわち、公務を掌るものに独特の仕事のやり方というものを作り上げる。この仕事のやり方の特長は何処にあるか？ その特殊性は何か？／二つある。すなわち、(a) ロシア的精神を吹きこんだ革命的熱情と、(b) アメリカ的精神を吹きこんだ事務的実行性である。党および国家の仕事に、この二つを結びつけると、われわれの仕事の「やり方」というものが出来上がるのである。」178P・・・ネップで資本主義的なものを取り込んだときに、当時のアメリカの資本主義的生産性第一主義のテーラーシステムなるものも取り込み、スターリン支配下で、まさに資本主義的精神以外の何物でもない生産制第一主義を持ち出し国家資本主義を確立させていくことになっていきます。ちなみに、わたしが大きな課題にしている障害問題とリンクさせておくと、ヴィゴツキーの「精神発達の理論」もそのような背景の中で生まれ、「発達保障論」という「障害者」抑圧の理論に結びついています。

「そして商業主義は、革命的幻想と同時に、レーニン主義の真の精神と相反するものであることを力強いおうとしたのだった。／革命的姿勢と、実務的精神との結合は、実務および公務に表れたる、レーニン主義の本質である。」181-2P・・・商業主義ということですり替えたごまかしの批判、問題は資本主義批判のはず。自分たちがアメリカ的生産制第一主義の論理を取り入れたから資本主義批判ができなくなった。

たわしの読書メモ・・・ブログ 610

・山口定『ファシズム』岩波書店（岩波現代文庫）2006

この本は1979年有斐閣から出された単行本の文庫本化で、最初に出していたものに、その後の理論的進捗状況を押さえて補説を書き加えて出しています。

最初に目次をあげておきます。

## 目次

新版への序言

旧版一の序言

### I ファシズムとは何か

- 1 世界現代史のなかのファシズム
- 2 ファシズム概念の明確化のために
- 3 比較ファシズム体制論の枠組のために

### II 運動としてのファシズム

- 1 「前ファシズム」運動の諸類型
- 2 真性ファシズムの大衆運動
- 3 ファシズムの「指導者」たち



- 4 ファシズムの社会的基盤
- 5 党組織の特質と疑似革命性
- III 思想としてのファシズム
  - 1 その端緒的形態と特質
  - 2 共同体思想の急進化
  - 3 「ナショナリズム」と「社会主義」の結合
  - 4 ファシズムのエリート主義と社会ダーウィン主義
  - 5 ファシスト帝国主義
- IV 体制としてのファシズム
  - 1 ファシズム体制の成立
  - 2 権威主義的反動と疑似革命
  - 3 執行権の独裁
  - 4 テロの制度化
  - 5 動員の制度化
  - 6 ファシズムと戦争
- V ファシズムの歴史的位罫
  - 1 資本主義とファシズム
  - 2 全体主義理論と近代化論
  - 3 反ファシズムの意味と可能性
- 補説 新たな時代転換とファシズム研究
  - 「ファシズム」研究関連文献一覧
  - 「岩波現代文庫版」あとがき
  - ファシズム関係年表
  - 人名索引
  - 事項索引

わたしはこの間パッチワーク的なファシズム理論学習をやってきたのですが、この本には後ろに歴大な文献表があり、本文の中でもいろいろなファシズムに関する議論が紹介されています。ひさしぶりにいろんなことを吸収できたと充実感を得ると同時に、その歴大な資料を前に、とてもこの課題でこれ以上学習を進める時間はないとため息をつくばかりです。わたしがファシズム論にそれなりに取り組んできたのは、現在の政治情況の中で、「ファシズムの芽」なり、「ファシズム的なこと」が隆起してきているのに、そのことの指摘が政治家たちからなされていないという現実があります。政治家たちにファシズム理論がないのです。そこで、ファシズム的な芽をもっている団体をきちんと批判できないで、リベラルということから転回してそのファシズム的団体と共闘関係を築こうとしているとか、何か政権与党やファシズムの芽的な団体を批判しているのだけど、どうもその団体自身がファシズム的なところに転落していく恐れを感じさせるとかいうことさえあります。

すくなくとも最低限のファシズム論をおさえないといけないと学習をしてきたのです。

さて、この本を読んで充実感をえたというようなことを書いたのですが、それは目次を

見てもらえばあきらかなように「運動としてのファシズム」「思想としてのファシズム」「体制としてのファシズム」とかいう大きな押さえをしつつ、いろんな観点からの分析をなして行っていることがあり、没落していく中間層や隆起してくる中間層が引っ張るとか、その中身について展開していること（Ⅱ4）。「心情的」という規定（134P・・・それは往々にして差別としての心情としての差別主義的ポピュリズムというファシズムの特質として表れてきます）。「ファシズムとしての思想はあっても、思想としてのファシズムはない」（145P）という規定。ナチの能動的ニヒリズム（195P）。後発の帝国主義の「生存権思想」（198P）などなど、ファシズムをいろんな観点から押さえています。

情動的に吸収することが多かったのですが、必ずしも全面的に共鳴的に読んだのではありません。いつもは、かなり細かい読書メモをとろうとするのですが、今回はこの本に対する異論的なことを軸にしてメモを残します。後で、自らこれまで書いて来たわたし自身のファシズム論と付き合わせて、「ファシズム論再考」を書く時にもう一度、この本のとらえ返しをしようと思っています。

まず第一に、全体主義ということとファシズムの関係があります。

わたし自身もすっきりしていないと感じていたことです。アーレントは、「全体主義」ということで、ドイツナチズムを軸にしたファシズムとスターリン主義下の「社会主義体制」を包括したのですが、この本の著者は、どうもそのことに批判的なようです。ナチスドイツが反共産主義ということのひとつの軸にしていることがあったからです。しかし、この本の著者はいろんな形のファシズムをとらえ返しています。それを読んでいくと、ファシズムの中の一つとしてスターリン主義体制をとらえられるのではないかと思えるのです。はっきりそうは書いていないのは、スターリン主義体制を「社会主義体制」と押さえているところから来ています。わたしはスターリン主義体制は国家資本主義で「共産主義の初期段階としての社会主義」という意味での社会主義ではないと押さえています。それはナチが、「国家社会主義労働者党」と名乗っていた、その「社会主義」、すなわちそれは個人が国家＝全体に奉仕するという全体主義としての「社会主義」なのです。だから、その意味では、スターリン主義体制はまさにファシズムの一体系なのです。

第二に、ボナパルティズムの問題をファシズム分析の一類型として押さえていないということです。マルクスが『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』でボナパルティズム論を展開しました。「体制の移り代わりの時に、新しい支配階級の力がまだ成熟していなくて、全体主義的なイデオロギーで統合を図る強権勢力がうまれること」という内容（わたしの押さえ）で展開しています。著者もボナパルティズムについて触れていますが（242P）、著者はファシズムの発生をそもそも第一次世界大戦の後に出てきたと書いています。そして、この本では、権威主義と全体主義の区別（311P）として、民主主義をくぐっているかどうか、ということを書いています。これでは、現在的にも後進国ファシズムとしてのボナパルティズム論を含みえません。そもそも権威主義ということは、天皇制ファシズムということでも表れています。結局、この混乱というか矛盾は、「著者は冒頭に述べたように、ファシズムか、そうでないかという軸は「全体主義」か「権威主義」かという「政治社会学」的区分とは別の次元のものであると考えている。ファシズムに「全体主義」的なものと「権威主義」的なものがあるが、一向にかまわないのであって、著者は、ほぼその区

分にあたるものを、本書では、「疑似革命主導型ファシズム体制」と「権威主義的反動主導型ファシズム体制」という概念を説明することにした。」(316P)としていることからするとボナパルティズムもファシズムの類型に含めることです。

第三に、反差別というところからのとらえ返しが希薄ということ。むしろ「私は、序言でも示唆したように、抑圧や差別があるところに片っ端から「ファシズム」のレッテルを貼ることには反対の立場だか、・・・・・・」(357P)という事さえ書いています(・・・・勿論単なるレッテル貼りのようなことの批判は当然ですが)。差別の問題からファシズムをとらえ返そうとしてきたわたしの立場からすると、ナショナリズムということの「ナショナル」を「民族・国家・国民」と訳せると言うことを著者も書いていますが、ナショナリズムやウルトラ・ナショナリズムとしての、排外主義やウルトラ民族主義としてのレイシズムということから、差別主義がファシズムの核となる思想として現れるし、それはファシズム批判の核となる国家主義批判にリンクするのです。

第四に、著者は補説で、現代ファシズム論ということを展開しようとしているのですが、それは「近代化論」をどうとらえるのか、資本主義が「帝国主義論」を経て、グローバリゼーションとして展開しているとき、新しい形でのネオリベとして顕れてきていることのファシズム的な中身を押さえる必要性が出て来ています。そもそも「近代化」ということもそのようなところから押さえる必要性も出て来ているのです。

途中で書いているように、改めてファシズム論の整理をしてみたいと思っています。

### (編集後記)

◆パソコンの具合が悪くなって、ひさしぶりに嵌まりました。何とか発刊にこぎつけました。

◆巻頭言は、自分の中の非論理的なこと、何か古い体質のようなことと向き合いつつ、揺らぎのようなことを文にしてみました。

◆読書メモで連載を始めた『世界の共同主観的存在構造』は今回はお休み、スターリン主義とファシズム論との向き合い、積ん読していた本の読書メモです。何か一冊読むと続きの課題がでてくるのですが、長年抱えている宿題の関係で禁欲せざるをえません。ただ、本文中にも書いたのですが、ファシズム論はもやもやしたまま文を書いてきたので、この本を読んだところで、改めて巻頭言で「ファシズム論再考」を書こうと思っています。

◆岸田政権は、極右的なアベ政治から保守本流への転換で、政権与党の自民党が支持率で一息つこうと出てきたと押さえていたのですが、アベ政治でもでなかった、大幅な軍拡と原発の稼働期間の延長に踏み込んで来ました。所詮保守政治の右翼化という枠内での、そして長年培われた極右政治から抜け出せないようです。そもそも野党がむちゃくちゃになっています。改めて理論的整理の中で、そして所詮国会という国家主義に規定されやすいところでない、民衆の運動の只中の中から、新しい流れを形成していく必要性を今更ながら考えています。いろいろな理論的整理なしていきたいと思っています。

## 反障害—反差別研究会

### ■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返ししながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

### ■連絡・アクセス先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp) (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>